

昭和

23

吉田健一

福永武彦

丸谷才一

三浦哲郎

古井由吉

文学全集

昭和文学全集



23

吉田健一

福永武彦

丸谷才一

三浦哲郎

古井由吉

昭和文学全集
第23卷

昭和六十二年九月一日 初版第一刷発行

著者—吉田健一 福永武彦 丸谷才一
三浦哲郎 古井由吉

発行者—相賀徹夫

発行所—小学館

〇〇東京都千代田区一ツ橋一丁目二番二号

振替東京八二〇〇番

電話編集・〇二二三〇—五六九六

業務・〇二二三〇—五三三三

販売・〇二二三〇—五七三九

印刷—大日本印刷株式会社

製本—大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙—三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568023-7

©NOBUKO YOSHIDA TEIKO FUKUNAGA SAIICHI MARUYA
TETSUO MIURA YOSHIKICHI FURUI 1987

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。

目次

福永武彦 185

吉田健一 5

15 290 塔

28 7 絵空ごと

43 350 告別

198

8 95 酒宴

45 305 冥府

旅の時間より

丸谷才一 393

10 103 昔のパリ

51 395 横しぐれ

10 113 大阪の夜

52 446 にぎやかな街で

11 123 英国の田舎

8 498 だらだら坂

4 134 移り変り

7 506 贈り物

47 138 ヨオロツパの世紀末 VII-XII

32 513 年の残り

9 545 歴史といふ悪夢

7 5 5 4 未来の日本語のために

36 5 6 3 日本文学史早わかり

三浦哲郎 5 9 3 194

19 5 9 5 忍ぶ川

13 6 1 4 十五歳の周囲

17 6 2 7 恥の譜

6 6 3 9 拳銃

5 6 4 5 河鹿

7 6 5 0 おらんだ帽子

5 6 5 7 がたくり馬車

12 6 6 2 蟹屋の土産

8 6 7 4 乳房

6 6 8 2 接吻

6 6 8 8 メリー・ゴー・ラウンド

7 6 9 4 ひとり遊び

30 7 0 1 暁闇の海

18 7 3 1 海村異聞

36 7 4 9 おろおろ草紙

古井由吉 7 8 5 194

58 7 8 7 杏子

30 8 4 5 妻隠

64 8 7 5 聖

山蹠賦より

6 9 3 9 静ころろなく

7 9 4 5 花見る人に

7 9 5 2 肱笠の 肱笠の

6 959 鯖磯れる道に

7 965 まなく ときなく

9 972 帰る小坂の

981 作家アルバム

解説

989 吉田健一……清水徹

996 福水武彦……水谷昭夫

1002 丸谷才一……後藤明生

1009 三浦哲郎……川西政明

1015 古井由吉……古井由吉

年譜

1021 吉田健一……清水徹

1027 福水武彦……野沢京子

1032 丸谷才一……小田切進

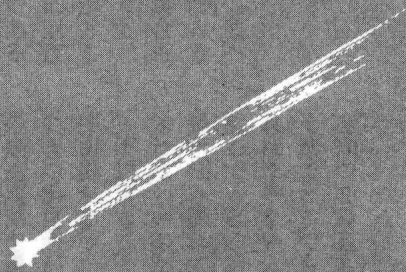
1037 三浦哲郎……三浦哲郎

1042 古井由吉……古井由吉

1048 底本について

1050 用字用語につらて

吉田健一



絵空ごと

Eraser Infame.—Volume.

1

この頃の東京は東京でないと云つてしまへば簡単である。併しそれで東京に住んでゐるものはどうすればいいのか。尤もその場合も色々分けなければならぬに違ひなくて、そこに住むものの多くが今日では自分がどこにゐようと全く無頓着な人種である時に東京がどんなであつても少しも構はない訳であるが、それが東京にとつて別に喜ぶべきことなのではない。どこの町でもそこが他所でも構はない人種といふのは有難くないものでさういふ人間の数が殖えるに従つて町が町らしくなくなる。これは全く妙なものである。又そんな風に町が町でないのがやり切れないものも別にゐて、そこが曾てはその町だつたこと

を知つてゐるものにとつてはなほ更である。それでどこでもその地着きのものがゐなければならぬといふことになるのであるが、ここでもとの話に戻つて、それならば東京に長年住み馴れて今でも東京にゐるものはどうすればいいのか。不思議なことに、例へば溜池の昔は電車の停留場があつた所が高速道路を被せられてどこなのか見当が付かなくなつてゐてもその上の高速道路を通つて渋谷辺から浜松町の方へ行く途中、自分が東京ではないどこか他所の町に来たとは思はない。そこから眺めれば普通は新たに出来た建物に隠されてゐる目印も見えるからといふこともあるかも知れないが、それならばそこからでは却つて見えない目印もあつてそのやうなことよりも高速道路からの眺め全体が明かに東京の町といふもの

で他所と取り違へる余地がないのである。これは戦後の東京の変り方を思へば怪んでいいことで道路の高さからすれば二十年前には郊外の緑が眼に映つた筈の所が今は建物に埋められてゐるのにやはり自分は東京にゐるのだといふ感じがする。或は別な例を取るならば、浅草は戦争中に全焼してその後何かも建て直されたのであるから今の浅草の仲見世ならば仲見世を写真に取つて三十年前のと比べるならばその二つが同じ場所であると考へられる訳がなくても浅草に実際に行つて仲見世を歩けばそこは紛れもない浅草の仲見世である。

さうした事情の説明は抜きにして、それ故に今日の東京にも東京が残り、それを拠りどころに確かな生き方をしてゐる人間もゐる。落合勤八もその一人で、勤八は四谷に住んでゐた。この四谷もどこまでが焼けてどこが昔通りに残つてゐるのか、その残つてゐる所も大部分建て直された今日では見当も付かないが四谷三丁目と四丁目の間で電車通りから少し入つた横丁に昔のままの家が両側に並んでゐるのがあつて、その一軒を勤八は空襲で焼け出された直後に旨い具合に手に入れることが出来た。つまり、それから又焼け出されずにすんだといふことで、その後何度か修繕はしても大体が初めにそこに来た時と少しも

感じが違つてゐないのに就ては勘八はいつも昔の大工仕事がしつかりしたものだつたのに驚いてゐた。その小さな庭は戦争中のことで原形を留めないまでに荒れ果ててゐて勘八は戦争が終るまでそのままにはふつて置き、それから植木屋に来て貰つて家に釣り合ふやうなものに作り直した。

その為に今はその前を通ると戦前から誰かが住んでゐて戦災も免れ、それからずつと手入れを怠らないのである家と庭といふ風に見えた。尤もその横丁一帯の家がこれは勘八と違つて戦前からそこに住み着いてゐた人達のものでなければ新築もせず、手入れも行き届いてゐて、新築すれば先づもととさう違はないものが代りに建ち、その辺を歩いてゐると今は東京に珍しくなつた屋敷町といふものの気分がしないでもなかつた。その屋敷町なるものの最も大きな特徴は凡てがひつそりしてゐて目立たないといふことで、この頃の屋敷といふのは金が掛つてゐることが何よりも目立つからさういふのが並んでゐる所は屋敷町よりも新式の新築の展覧会に迷ひ込んだ感じがある。併しそれよりも勘八は自分の家を出たりそこに戻つて来たりすればその辺には人間が住んでゐるのが解ることに満足した。これは季節毎に方々の庭の様子が變ることでも明

かで、自分が住んでゐる所に愛着があれば庭の植木にも念を入れることになる。

のみならず四谷の町並が勘八の眼には昔からの四谷に映つた。これは四谷見附に赤坂離宮の方に向つての緑があることから始まり、新宿に行く電車通りが広い割にその両側に小さな店ばかり並んでゐる具合もはつきりそこが四谷であるのを感じさせた。もともと勘八は四谷の住人ではなくてただ東京にゐて見馴れた四谷だつたのであるから昔の店がもとの場所に残つてゐるかといふ風な細かいことは解らなかつたが、それよりもその通りを歩いてゐて向うに小さな果物屋があるとそれが如何にも四谷の電車通りの果物屋なのでその店が新築しただけで昔からそこにあつたといふ気がした。その感じを強める為よりも自分が或る所に住んでゐることを確認するのに幾つかの決めた店にいつも行くことが大切で、さうして決めた店と勘八ももう何十年かの付き合いひになつてゐた。本当は表通りを歩いてゐてどの店とも又その主人とも馴染みであるのが自分が故郷と呼べるものにあることなのであるが、それには四谷の通りが大き過ぎた。

さういふ店の一つに四谷見附から新宿の方に向つて最初の角を右に曲つた横丁に酒場があつた。そこは他にもその種類の店が沢山並

んでゐる所だつたが勘八はその酒場にしか行かなかつたからその名を挙げる必要もない。

勘八がそこへ行き出したのは戦争が終つて酒場などといふものが闇でも又商売を始めてからのことだつた。併し解せない感じになるのは戦争になつて最後まで踏み止つた酒場や飲み屋が東京の所どころでまだ店を開けてゐた頃その酒場で何度か飲んだといふ記憶のやうなものがあることで、それに従へば店は同じでも場所が四谷でなくて新宿の盛り場だつた。勘八が四谷に移つてから最初にただ気紛れにその店に入つて行つた時に一目でそこに前に確かに来たと思ひ、それからそれが新宿だつた筈であることが直ぐに頭に浮んで来てその所が怪しくなつた。併し入つて正面に酒場の止り木があつてその向うに店の主人らしいのが立つて働いてゐる具合も、止り木の上の日本間ならば鴨居に當る所に掛けた小面の能面が古いものではなくて酒場の埃で黒ずんでゐるのも見覚えがある気がしてならなくて、それでももしその主人らしいのがその主人ならばこれは知らない人だつた。

向うもその店の給仕達も勘八を振りの客に扱つたのは代が換つたといふことで説明が付いたが二つの違つた場所に同じ一つの店があるのはやはり不可解で、これはそのまま謎になつて勘八の頭に残り、それが一種の魅力に

なつて四谷で洋酒を飲む時にはそこと決めただからやがて勘八は主人とも給仕達とも馴染みになり、ただその店がどうして新宿から四谷までそつくりそのまま持つて来られたのかといふやうなことは幾ら酔つても聞けなかつた。その店の壁に止り木の上の能面と別に關係があるとも思へない楕円形だえんけいの金額に入つた十九世紀風の鏡や明治初期の錦絵にしんゑが掛つてゐるのも眺めてゐるうちに確かに前に見た覚えがある気がして来て、ただその為には勘八はその方に眼をやり、それは自分が同時に二つの場所に、或は過去と現在の両方にゐる快感に似てゐた。そこで出す飲みものも悪くはなかつたが、これは酒場に置いてある程度のものならば今日では東京でも世界のその他どこでも先づ同じだと言へる。

前に見たことがあるのかどうか、その主人にも勘八は何か惹かれるものがあつた。初めからバーテンだつたのでも途中から例へば道楽が病み付きになつて本職のバーテンになつたのでもそのどつちでも可笑おかしくもない年輪、或は風格がその日焼けした顔に現れてゐて、無駄口を利かなくて親切なのも余計なことに頭を悩まさなくなつたのから生じるゆとりを取れた。それが店の流儀にもなつてゐるやうで給仕達にも及び、そこではただ飲んでゐればいい安心が勘八だけに止らないらしく

てその店にはその定連があつた。勘八が早くからその一人だつたことは言ふまでもない。さういふ店の定連だつたから身元も何も知れてゐる一つの町内もの同士がその溜り場どまりばに集るといふのも違つて、その店に来る客を勘八は大概知つてゐて親しく口を利く間柄になつてゐながらその銘々がどういふ商売のものかは勿論のこと名前さへも余りはつきりしてゐないのが多かつた。その店のさういふ所も勘八の氣に入つてゐた。

この辺で勘八自身は何をしてゐたか書いて置いた方がいいかも知れない。勘八は何もしてゐなかつた。併しその半生を振り返つて見ると大抵のことはしたやうで、さうして何度も商売を変へたのは失敗ばかりしてゐたからではなくてその逆だつた。その一番初めは友達に頼まれて捨て値で買つた土地が法外に値上りしたのがきつかけで暫くやつてゐた不動産の売買だつたが、これは当分使ひ切れさうもない財産が出来ると続けるのが意味がなくなつたので止めた。その次はやはり頼まれて一口乗つた私鉄会社の設立だつただらうか。これも當つて勘八はいい加減な時に役員を止めた。そんな風にやつて見ては止めたことの順序など覚えてゐられるものではなくて、それを思ひ出さうとするとただ切れぎれに頭かぶに浮ぶものがあり、まだ昇降機といふものがな

い頃にビルの四階にある事務所まで階段を登つて行く所や、自分が乗つてゐる船が艇せりに引かれて神戸港を出て行くのや、ドイツの鉄工場てつこうで視察の一行から離れたのを見咎められてしどろもどろの返事をしてゐるのが僅かな間記憶に戻つて来るだけだつた。南太平洋で黒真珠の養殖をしたこともあつてこれは外国の市場向けだつたから派手だつたが、その黒真珠もまゆ篋に入れて持つて来られると何故そんなものが珍重されるのか解らなくなつた。又戦後は關物資といふものがあり、それで今は又何もしてゐなかつた。

そんなことで世が渡れるものではないと思つたりするのも小説を読み過ぎるからである。併し兎に角、四谷の酒場で飲んでゐる勘八は生活の手段を生活と取り違へて金が入つて来ることを生活の保障と考へる程の馬鹿、或は現代人ではなくてそこは確かに東京の、又東京といふやうな抽象的なことでは話にならないならば東京にある四谷の酒場だつた。或はその店が新宿にあつた氣がするのも新宿で行つてゐた店とそこに共通の性格の中なかでも著しいのが一軒の店である感じが克明である点にあるからではないかとも思ひ返された。昔はそれが当り前なことで今はそれを探さなければならぬのはただそれだけのことで、もし自分が立つてゐる地面が水に浸されて来

たならばどこかまだ水の上に出てる所を見付けて廻らなければならず、それがなくて水が増す一方ならば何れは溺れ死にするのだから、まだ死ぬ時が来てゐなければ水の方でそのうちに引き始める。

或る冬の日の午後、昼寝から覚めて天気がいいのでその店まで歩いて行つて煙草を吸つてゐると又一人客が入つて来て勘八がゐる卓子の前で立ち止り、

「元さんの画廊が店開きするんださうです、」
と言つた。

それで少くともその元さんといふのは一種の画商、或は画商の仕事もする人間だつたことが解る。その店開きのことを言つたのも勘八がその酒場で仲よくなつた人間の一人で何か会社をやつてゐるらしいことを人と話してゐる時の様子などで勘八も知つてゐた。併し親しくなつたのはさういふことと關係がなくてその小峰さんといふのがただそこで飲んでゐてもそれがその小峰さんといふ人間の世界の一部分での出来事でその世界がどういふものなのか見当も付かないままに確かにどこかに、或はそこに小峰さんの世界がある感じがすることが勘八には魅力があつた。それならば寄つ掛つて来られる心配がないのも気持がよかつたが、この小峰さんを前に置いてまだ自分が知らない景色がもう少しで眺められる

のではないかといふ思ひをすることが勘八に自分もさうした一つの世界に住んでゐるのではないかといふことに気付かせた。さうなると人間といふのが懐しいものに感じられる。

その日も元さんの画廊のことは一応それだけで打ち切りになつて二人はまだ電気が付かなくて外からの日差しが床の一部に及んでゐる中で飲み始めた。それはウイスキーで、いつまで飲んでゐても別にどうといふことがないのがその日の午後に似てゐた。小峰さんも何を言つても変な風に取りられるのを気にしないでゐられる程度には勘八と親しくなつてゐて、

「日本でもの凄く上等なウイスキーつていふのを飲んで大して旨くないのは妙ですね、」
と感想を述べた。

「さう、それだからこの位で丁度いいんでせう。その本場から遠過ぎるんでせう。尤もその本場と言つても、——」

「さう、ウイスキーと同じ色をした水が流れてゐる川に小さな石の橋が掛つてゐて、橋を渡つた先の飲み屋の前を汚れた毛の羊の群が通つてゐる。その飲み屋に入れば小さなウイスキーの樽が幾つも逆さに止り木の向うの壁に取り付けてあるといふ所ですか。」

「その通りですよ。よく本場つていふことを聞かされるけれど、それがどんな本場なの

か、外国ならばどこでも本場なんですかね。それぢやここはどこなんだ。」

「併し外国にゐてこのことを思ひ出すこともあるんだからここも四谷の本場なんですよ。かういふ小さな店が沢山並んでゐる横丁が昔から四谷にあつた。」

勘八はそれを聞いて自分が確かにそこにゐるのを感じた。さうするとその延長で東京の町が拡つて行つて、

「元さんの画廊を覗いて見ませうか。さうしないと義理が悪いでせう、」と言つた。

「今直ぐでなくてもいいでせう。どうせお祝ひの会か何かがあつて、それが早く終る訳がない。」

夕方になつてそこを出ると二人は元さんの画廊がある銀座に行く車を電車通りで拾つた。四谷見附に立てばそこが四谷であるのにそこから赤坂の方に降りて行く赤坂と四谷の境目に当る濠端がどこも付かない全く荒涼たる感じがするのは妙である。これはお濠や昔の宮家の庭木が見馴れたもの、或は兎に角前からあつたものであるのに対して高速道路や新たに出来たホテルその他がまだそれ程眺めの中に溶け込んでゐない為だらうか。その証拠に赤坂見附を越すと溜池まで大体これまでと同じ感じの建物が並び、その全体の様子から赤坂に来た気がし、溜池を過ぎて新橋に

向へばその辺が昔からのそこであることはもう間違ひない。それが新橋、銀座の歴史といふものかも知れなくて、その点では確かに赤坂といふのが戦前から何か宙ぶらりんの性格の町だつた。併しこれは例へば新橋から数寄屋橋の方に行く通りの建物が昔と少しも變つてゐないといふやうなことではなくて、その或る町角に元さんの画廊があるのが勘八と小峰さんが探してゐるうちに見付かつた。

その画廊は小さなもので元さんが直ぐに二人の方にやつて来た。その日が店開きなのだから振りの客も入つてゐたが、奥の部屋にこの頃よくあるやうな立ち食ひに立ち飲み式の会の用意があつてその戸の所に「立入禁止」といふ札が貼つてあつた。小峰さんがそのことを元さんに言つて笑つた。

「ここで余り盛大にやると誰かあの札を剥がして入つて来ませんか。」

「いや、中を見てここは他所の料理屋だと思ふでせう。序でにあの店をこの応接間と間違へて是非ここに掛つてゐるこの絵を譲つてくれなんていふのが出て来るといひだけだ。」

さう言へばその店は絵が割にあるのからすれば画廊だつたが全体の作り方は寧ろ絵の数が少くない余り大きくない応接間で、その方へ奥の部屋から出て行つて又奥に戻つて来る

のが一軒の家の中にある気分を壊さなかつた。勘八も一度店の方を見て廻りに出掛けて元さんと小峰さんがゐる所に戻ると今度は小峰さんが出て行つて勘八が戻つて来た小峰さんと顔を見合せると次に二人とも元さんの方を見た。元さんがにやにやして、

「どうです」と言つた。

勘八はそれで漸く納得出来てもう一度絵を見に行つた。そのどれも殆ど例外なしに前に見たことがある名画の贋もので、元さんが自分で言つてゐるのだから贋ものに違ひなかつたが、それにしても贋ものの絶品で寧ろ肉筆でやつた精巧な複製といふ種類のものだつた。どんなに發達した方法による複製でも肉筆の味は出せなくて、勘八は一枚一枚の絵の前に立ちながら何十年も前に行つた切りの外国の美術館にゐる錯覚を起し掛けた。それは殆どその頃の自分に戻る感じでコロの湖が背景になつてゐる絵では前景の木の枝が絵具のいかすりであるのにもう一度震へ、レオナルドのベアトリチエ・デステの肖像では人物が真横を向いてゐる効果を改めて不思議なものに思つた。勘八は絵などといふものに見切りを付けてから大分になつてゐるのでそれだけ容易にただ夢中になつてゐた昔の自分に戻れたのかも知れなくて、それでこれも何十年振りかこれだけの絵の中でどれか一枚と言

はれたらどれにするだらうといふ考へが頭に浮んだ。勿論そんなものがある訳がなかつた。

勘八が又店の方に行つた後で小峰さんは、「確かに名前も何も書いてありませんね、」と元さんに言つた。

「ええ、併し書いたつて詐欺になりますかね。ロンドンの国立美術館にあることが解つてゐるものが日本に来てゐる訳がないでせう。それに美術の本にはレオナルドだとか池大雅だとかの絵にちゃんとその名前が書いてあつてそんな写真を誰も本ものとは思はない。併しあれだけ集めるには、いや、あれは余り気に入らないのだけなんだけれど、それでもあれだけでも大變だつた、今になつて思へばね。」

元さんは勘八と小峰さんが来てくれたので漸く自分の夢が本当になつたのを確めることが出来た。それまで何十年の間にもう名前も覚えてゐない程多勢の画家に頼んで写して貰つた絵はその費用は別として写す許可を得る手続きだけでもうんざりしたことが幾度もあつて、それも最初にさういふことをやつて見たのが旨く行つたのが言はば病み付きになつたのだつた。従つて元さんは画商ではなくて手つ取り早い所で大金持だつたといふことになるだらうか。確かに元さんは金に困らな

くて、それも勘八のやうに自分でその金を作ったのでもなかつた。尤もさうした生れながらの大金持といふことになる。今日の日本ではそれに又金ともそれを持つてゐる人間とも縁がない各種の観念が付き纏つて、その中でも最たるものが第一にそんなものはゐないといふこと、次にはもしゐればさういふのは人間ではないといふことである。併しここに元さんがゐるといふことで話を進める。

勘八は二度目に絵を見て廻つてゐるうちに一枚の分類の上からすれば現代画といふことになりさうなものの前まで来て他の絵よりも長くそこに立つてゐた。それも戦前、又その戦前も既に半世紀近くも前にどこか外国の個展で見たことがあるもので画家の名前はもう思ひ出せなかつたが題は覚えてゐた。それは「孤島」といふので絵そのものがその題を忘れ難くし、水平線で区切られた海を岩の頂が前景に見えて遮り、その岩に信天翁が一羽止つてゐる絵だつた。それ故にこれを絵解き風に孤島の意味に取ることが容易で、従つてこれは文学でなければ絵の世界に対する文学の介入といふことになり、といふ具合に今日の美学からすればかうした絵は問題にならない。併し実際に孤島の突端に鳥が一羽止つてゐるのを見て何と思ふかは別としてその絵では鳥が岩に止つて海に向ひ、海には日が差し

てゐて勘八はそれを前に見た時に何か動かせないものを感じ、今もそれを感じた。その効果を疑ふならばコロの木の枝も信用出来ない。併しかうなると元さんもこの絵の原画を見たことがあることになつた。

奥の部屋に戻ると小峰さんの他にも既に何人か集つた客の誰にともなしに元さんが、「だから値段は写し料だとか運賃だとかの実費といふことにしたかつたんだけど、その実費といふのがね、」と言つてゐた。「つまり、本ものの何分の一にもならないといふ考へだつたのが、どうもさうは行かない。その本ものが幾らしても贋ものを作る実費を正確に計算すればものによつては何百万にもなつて、そんな金を贋ものの絵に出す程酔狂な人間がゐますかね。やはりこれは相談といふことになるよ。」

「併しその贋ものを作るのに何百万も出すのがゐるんだからね、」と客の一人が言つた。「私だつて欲しいのがある。」

それに応じて客達が一時に何か言ひたさうにしたので元さんは少しばかり狼狽の色を見せた。

「まあ、今日は店開きしたばかりなんだから。私が毎日ここに来てゐる訳ぢやないけれど誰かゐる筈だから又お通り掛りの節といふ奴。併しどうです、あんな風に並べると。こ

つちがやつたことをどうですもないもんだけれど本ものでなければあした贋ものの方が私には複製よりもいいね。」

「第一、どれも贋ものだつていふのがいいんですよ、」と小峰さんが言つた。「さうではなくて本もののばかりの何々展ていふのは肩が凝つていけない、ただ人に揉まれてゐるだけでも肩が凝るよ。これなら贋ものだから芸術だの流派だのつて面倒なことを聞かされずにすむし、誰も有難がらない所でゆつくり楽める。まあ、向うにあるやうな美術館を一つ元さんが作つてくれたといふことになるかね、尤も向うのは本ものだけだ。」

「併し補充は利くんですかね、」と又客の一人が言つた。「我々でなくても買ひ手つていふものがあるでせう。」

どうもその晩の空気が絵が今にも持つて行かれさうなので元さんは飲みものが残つてゐる限りそこで飲むといふ最初の予定を変へた方がいいやうな気がした。

「どうです、皆さん、」とそれで言つた。「皆さんだつて銀座に毎晩来てゐる訳ぢやないでせう。今晚はいつも四谷で飲む仲間が二人ゐるけれど、これからどこかの辺で飲みませうか。そつちの方は本ものを選ぶ。」

勘八と小峰さんは初めから元さんと飲む積りで来てゐて他の客も絵を見るまでは元さん

との付き合ひで店開きに出掛けて来ただけだつたから誰も反対しなかつた。ただ一同の数が減つて表通りから銀座の暗い横丁に入つた頃には小峰さんと勘八の他に客は一人になり、その客を元さんは戸塚さんと呼んでゐた。元さんも銀座で飲むといふのがさう簡単でないのを知つてゐた。あれだけの店が表通りから横丁まで並んで夜遅くまで開いてゐながらその中で何となく飲んでゐられる店といふのが戦後に激減し、この場合も銀座で銀座を探さなければならぬ。又さういふの一軒見付けて安心してゐても銀座は変化が烈しい所でその次に行つた時にその店がもとのやうであるかどうか解らず、そんな風に変らない店はそれだけに大事にする必要がある。併し店の方はどうであつても変らないのは銀座の横丁や裏通りの夜で、これは仕事が終つて今晚はどうして過さうとさ迷ひ歩くものの群が銀座といふものが出来て以来少しづつ作り上げて来た一つの竹ひなのかも知れない。

元さんは縄暖簾を潜つて二階に登つて行く店に皆を案内した。実は潜つた向うに料理人が客を待つてゐる台があつてその他にもその土間に卓子が置いてあつたのであるが、台の脇に梯子段があり、それを登つた中二階に相当する所に又一つ卓子と椅子が幾つか置いてあつた。その上が二階の座敷で、ただ連れ

が誰も自分と同様の洋服姿なので所謂、料理屋でもない所で皆を坐らせるのが気が引けた。その中二階の窓から裏の横丁が見降せて、そこからの明りと店に付いてゐる電灯の映り具合で元さんは時々その卓子に来るのが好きだつた。それが幸にその晩も空いてゐた。

「前は掘割といふものがあつたもんです、」と元さんは外を眺めながら言つた。「それを埋めればそれで出来た土地で儲るから埋めたんだね。実に簡単を話さ。それに掘割は皆繋つてゐるから一箇所を埋めれば水が腐つて皆埋めなければならなくなつて又土地で儲る。誰か知らないが旨いことを考へたもんだ。我々はアメリカに占領されてゐたなんて言ふけれど、その占領中にどこから来たのか解らない日本人か何かに實際は占領されてゐたんだよ。」元さんはそれまでウイスキーを飲んでゐたその調子でそこまで言つてから自分が主人役なのに気が付いた。それに今出てゐるのは日本酒だつた。「併しここから見るとどこか傍に水が流れてゐる気がしやしないかね。」

それを小峰さんが盲く受けてくれて、「あの車の光がちかちかするのが昭和通りでその辺が三十間堀だつたんですよ、」と言つた。「それで日比谷の方から歩いて来て橋を

三つ渡つて築地まで行つた訳だ。」

「今だつて勤業銀行の所からガードを潜つてこつちへ来る道は昔通りの感じ、つまり、日比谷から銀座へ行くつていふことをする道ですよ、」と戸塚さんといふのが言つた。戸塚さんは文士とか写真家とか何かさういふ職業の人間のやうだつた。「もうガードのこつちを水が流れてゐないけれどね。あれは何といふ橋でしたつて、幸橋か。あれは木の橋だつた。併しガードの辺から新橋と数寄屋橋の間の通りが見えて来て銀座に来たと思ふのは昔と同じですよ、あんなに建物が変わつたのにね。日航ホテルなんてなかつた。併し突き当つた直ぐ脇にお稲荷さんか何かがあるのは昔と同じでせう。それよりも、——どういふことなんですかね、これは。昔と同じ人間がこの辺に住んでゐる訳ぢやないのに。」

「我々がその人間なんですよ、」と勘八が言つた。「銀座といふものがまだ我々を銀座に来させるのか、我々が来るから銀座がまだ銀座なのかはどうだつていい問題である以上に同じ一つのことなんぢやないでせうか。我々が来なくなるのが銀座つてものがなくなつた時で銀座が銀座である間は我々も来る。結局は東京も、」と言ひ掛けて、勘八は思はず他の三人を見廻した。「併し東京が東京でなくなつたからと言つて我々がどこかのそのレジ

ヤー・ビルデンス・デラツクス・コロナ・タ
ウンとかいふのに引つ越しますかね。」

話がそんな調子で続けて行かれることにな
れば元さんも榮だつた。その店を出すのは樽
の酒で水に近い味がし、蟹が食べ頃だつた。

これも本場でなければと勿体振つた所で灘の
酒も日本海の蟹も東京に来れば東京での味が
ある。

「この頃は流しつてものがなくなつたやうで
すね。」と元さんは言つた。「この辺を歩いて
ゐて夜出会ふこともない。」

「それはバーつてものにいらつしやらないか
らでせう。」と戸塚さんが言つた。「この頃の
バーにですよ。あれは昔ならばカフェーつて
言つたものぢやないでせうか。あんなのはお
上りさんが行く所になつてゐたものだけれ
ど。昔のバーつてのは何と言つても天下泰平
で文明の時代だつた一つの証拠だつたんぢや
ないでせうかね、あんなことでやつて行け
つていふことは。尤も五・一五の時の軍法会
議で叛乱軍の将校が帝都の女給二万人とか言
つて怒つてゐたけれど。」

小峰さんもその昔のバーといふのを知つて
ゐた。

「さう、天下泰平ならば、世相がどうだらう
と天下泰平ならばお寺の境内に腰掛けの茶屋
があるやうにあのバーといふ風な店もあるこ

とになるんでせうね。確かに今から思へばい
いものだつた。そこへ入つて行けば止り木の
向うにパーテンがある他に卓子が五つか六
つ、いや、三つつていふのもあつたか、それ
に女給さんが二、三人で、さういふのがバー
といふものだつたんだから。それを怒つた叛
乱軍の将校達が志士だつたならばあの女給さ
ん達も、気概といふのかね、いや、腰掛け茶
屋の婆さんの誇りとそれから何だらうね、明
日になれば又朝が来るつていふ安心があつた
よ。それがなくなるまで我々はそれが当り前
なことのやうに思つてただ飲んでゐた。」

「併しそこから何かが生れたんでせう。」と
戸塚さんが言つた。「例へば日本の近代と
か。」

その卓子の所から眺めると築地の方から新
橋の方に向つての銀座の町から差す光が闇を
明るくする代りにそれに一つ一つ浮んでゐる
感じで、この町が所謂、銀座といふ町になつ
てからの冷たさが今でもそのまま残つてゐる
ことが解つた。それは人が住むよりもそこに
来る町で、そこに客になつて来るのだつたか
ら店を長持ちさせる為の客扱ひの心得を思は
せるものが銀座の性格にもあつた。そこに人
を引き留めるものがあつても昔の色町が趣向
を凝らしたこととそれは正反対のもので飽き
が来る前に人は屈託もなく帰つて行き、朝の

銀座はさつぱりしたものだつた。勘八はその
銀座といふ町を知つてからの何十年かに銀座
で過した時間が朝と昼と夜の区別はあつても
ただ一日のやうな気がした。それ程町の様子
まであつさりしてゐて、ここの煙草屋で煙草
を買ふのと自分が住んでゐる町の煙草屋でと
は違ひ、銀座のどこかの店に行き付けのが出
来てもそこで長話をしたり入り浸つたりする
のは田舎ものがやることだといふ気がした。
併しそれが都会のよさでもあるならばと考へ
て来て銀座の裏通りに住むといふのが急に勘
八にとつて魅力がある一つの夢になつた。

丁度元さんがそれを地で行く話をしてゐ
た。

「朝起きるとカフェーに行くでせう。さつき
戸塚さんが言つていらしたカフェーぢやなく
てあのパリのですよ。さうすると御承知のや
うな朝の食事を持つて来て顔馴染みの給仕な
ら何か言つたりするけれど直ぐ向うに行つて
しまふ、忙しいですからね。それから新聞で
も読んで昼までそこにゐても誰からも文句は
出ないし、直ぐに勘定をするのも自由で一日
中をその伝で過せる。言はばパリのどこに行
つても自分の部屋に一人であるやうなもの
で、それでゐて飲みに出掛けてパーテンと冗
談を言ふことだつて女を買ふことだつて出来
る。何かあんな風に雑音がなくて暮せるつて